学校だより
とき・あかし錦城
2022年（令和4年）
3月9日（第83号）
明石市立錦城中学校

ゆったりと春を迎えたいけれど

校長　谷郷昌弘

3月も半ばにさしかかり、年度末の慌ただしさに拍車がかかってきました。昔から「1 月は行く、2 月は逃げる、3 月は去る」と語呂合わせのような言い回しがありますが、時代が変わっても年明けから春にかけて、時の流れの速さは本当に驚くばかりです。

この間、3 年生のみなさんは文字通り正念場。私立入試、高専入試、公立推薦入試ときて、これから公立一般入試を迎えます。どうか自分の持てる力を出し切って、悔いのないよう臨んでください。もちろん試験ですから、不安な気持ちはみんな持っています。しかし、ただ耐えればよいというものでもありません。できることなら少しでも気持ちを軽くして臨みたいものです。強がらず、不安な気持ちであれば、周りの人に話してください。お家の方でも、友だちでも、先生でも、だれでもよいのです。話すことで不思議と気持ちが落ち着きますよ。開き直れたりしますよ。「どないかなるわ」という気持ちも湧いてきますよ。

そしてすぐ後には卒業式。誰にとっても「出会いは別れの始まり」とは分かっていますが、名残惜しさは尽きません。いいことばかりではなかったかもしれません。しかし、いざ離れ離れになるときが迫っているのを前にすると、今日この一日がもっとゆっくり過ぎてくれたらいいのに、と感じている人もいるでしょう。ああ、この仲間と一生ともに過ごしたいと思う人もいると思います。しかし、無情にも別れはやってきます。思い出が楽しく美しいものであればあるほど、別れの辛さは増すものです。どうか皆さん、せめて、この辛さはよい思い出に包まれて過ごせた証しととらえ、互いの存在に感謝しましょう。そして、これからの互いの人生が輝きに満ちたものとなるよう、心の中でエールを送り合いましょう。

さて、1, 2 年生の皆さん。3 年生の後を引き受けるのはあなたたちです。4 月からはみなさんが錦城中の「顔」です。みなさん一人ひとりの姿が、そのまま「錦城中生の姿」となります。新年度からはきっと錦城中の新たな進化を見せてくれることでしょう。卒業していく 3 年生の先輩たちも同じ気持ちだと思います。

あれから 11 年

2011 年 3 月 11 日。11 年前のこの日、明石市立の中学校は卒業式でした。午前 10 時に始まった式を終え、校内が落ち着きを取り戻しつつあった午後 2 時ごろ、職員室で誰かが「東北の方で大きな地震があったらしい。」と言いました。別の誰かがテレビをつけ、そこで流れた映像に誰もが凍りついたのをはっきり覚えています。

その日は東北でも多くの中学校で卒業式が行われた日。ニュース映像で正装のお母さんが何度も映りました。不安と焦燥が入り混じった瞳を忘れることはできません。晴れの日に突然姿を消したわが娘を探しているのです。大混乱で人々が慌ただしく動いている中、そのお母さんの姿が何度もテレビに映りました。あてどなくわが子を探しつづけ、泣くことすらできない母。

戦後最大の自然災害として被災者の数の多さに心が痛みます。でも、一人ひとりにとっては「あなた」がすべてなのです。

あなたはどう生きますか

今現在、東欧の国ウクライナで戦争状態が続いています。80 年近く戦争に直接かかわらなかった日本人にとって、別世界の出来事のように感じる人も多いでしょう。しかし、残念なことにこれは現実です。罪なき人々が危機にさらされています。大切な命が今も消えています。

いろんなところで批難の声が上がり、日本国内を見ても戦争反対デモがあちこちで起きています。正義を掲げ、不正義に対して怒りの声を届けようと、毎日のように報道されています。

さて、この文章を読んでくれている皆さんの中にも、憤りを感じている人は少なくないと思います。私もその一人です。そのうえで自分に問いかけたい。解決につながる何かをあなたは（自分は）したのだろうかと。対象が大きすぎて自分にできることはほとんどない。そうでしょう。そうでしょうが、それでも自分の範囲内でできることはないのか。

まず、知ってください。自分と関係のあることととらえてください。遠く 80 年前、日本は同じ状況にいました。今のあなた（自分）と確かにつながっています。ウクライナの惨状も今のあなた（自分）と確かにつながっています。

知ることをやめ、考えることをやめ、そして世界はきっと、ずっと平和だと思い込んで生きていけるのでしょうか。これから先、誰だって平和な日本でいてほしいと願うでしょう。でも、それはどうすれば守れるのか。若い皆さんにこの国の将来は任されています。